

日本語学校に在籍する中国人留学生の段階的サポートニーズ

－フォーカス・グループ・インタビューから－

臨床心理学コース 安 婷 婷

The Need-Based Support of Chinese International Students Studying at Japanese
Language Schools: Results of Focus Group Interviews

Tingting AN

Japan is accepting more international students to study at Japanese Universities, Colleges, and Japanese language schools. The Japanese government and university foundations give a certain degree of monetary support for daily expenses; however, current mental health support remains an issue of concern. There does exist mental health support for international students at some universities and colleges, but this support is almost nonexistent at Japanese language schools. In order to provide appropriate support, it is essential to understand the needs international students have at different phases of their study in Japan. This paper investigated the need-based support of Chinese international students studying at Japanese language schools. Four groups of Chinese international students ($N=19$) were interviewed. They were divided by length of stay (2 groups each for shorter than 3 months or longer than 6 months). Data were collected via focus group interviews and were analyzed qualitatively. Results showed that students' support needs changed according to the length of their stay in Japan. Results also revealed that, if some of the problems such as lack of correct information and little support for entering universities were not solved sufficiently early, the problems would get more severe and might lead to further problems. Results also suggest the necessity of support for international students starting early in their studies at Japanese language schools. At the same time, support must match changes in their needs.

目 次

問題と目的
方 法
結 果
考 察
文 献

問題と目的

日本在住の留学生は、高等教育機関（大学、大学院、短期大学、高等専門学校、専門学校）に在籍する外国人学生と、日本語教育機関に在籍する外国人学生に分けられる。後者は従来「就学生」と呼ばれていたが、2010年7月15日に在留資格「留学」と「就学」が「留学」に一本化され、「就学生」も「留学生」と呼ばれるようになった。日本学生支援機構の外国人留学生在籍状況調査（2016）によると、2015年5月1日時点では留学生数は208,379人であり、高等教育機関に在籍する外国人留学生数は152,062人、日本語教育機関に在

籍する外国人留学生数は56,317人となっている。彼らの多くはその後大学・大学院などの高等教育機関に進学していることから、高等教育在籍留学生の予備軍とも呼ばれている。また、出身国の割合では中国人留学生が一番多く、留学生全体の半分弱を占めている。

留学生のメンタルヘルスについては、大学・大学院の留学生を中心に研究が進められてきた。留学生は異文化適応の課題も抱えており、学業以外にも多くのストレスを抱えている。箕口・江川（1994）は留学生のストレスとして、言葉、経済的負担、孤独感・寂しさ、母国に残してきた家族（恋人）、母国に関する情報の入手、入試（大学院など）、研究方針などの母国との違いを挙げていた。大橋（2008）では、留学生のストレス要因として、「人間関係」「勉強・研究」「経済・住居」「日本語・文化」「心身健康」の5因子が抽出され、「人間関係」「勉強・研究」「経済・住居」「心身健康」の4因子はSDS（Self-rating Depression Scale）得点と正の相関があると示された。このように、留学生の場合は学業上のストレス以外にも、言葉、文化、人

間関係、心身健康などのストレスを抱えている。

では、日本語教育機関（以下日本語学校）の留学生の場合はどうだろうか。これまでの先行研究は大学に通う留学生に関するものが多く、日本語学校に在学する留学生に関する議論は少なかったが、大学などの高等教育機関に在学する留学生（以下一般留学生）と同様に、日本語学校の留学生も多くのストレスを抱えていることが明らかにされている。日本語学校の留学生は、日本語レベルの低さ、経済的苦しさ、ビザの取得、受験や進学などに悩み、特有の心理不安を持っている（加賀美、1994；浅野、1997）。伊能（2004）は就学生が来日後直面する問題について、「経済的問題」「日本語学習に関わる問題」「生活に関わる問題」「人的交流に関わる問題」の4つの側面を指摘した。

両者の比較研究は割合が多い中国人留学生を対象としたものがほとんどである。日本語学校に在学する中国人留学生は一般中国人留学生に比較して、勉学上の問題などに関する悩みが多いことや、主観的幸福感が低いことが示されている（邱・孫、2009）。また、村瀬（1996）はBDI（Beck Depression Inventory：ベック抑うつ質問票）を用い、日本語学校の中国人留学生と一般中国人留学生を比較した結果、一般中国人留学生（23.9%）に比較し、抑うつ症状を呈する日本語学校の留学生の割合が多かった（28.9%）。そのうち、不満足感、情動発作、体重減少の項目で、一般留学生よりBDI値が高かったという。江・顧・李・李・韓・野島（2009）の実態調査では、SDSとGHQ30を用いて日本語学校に通う中国人留学生のメンタルヘルスを調査した結果、SDSの平均得点は40.71（ $SD=8.16$ ）と高く、得点がカットオフ値の40点を超えた割合は55.4%に上り、半分以上が軽度から重度の抑うつ症状を呈していることが分かった。GHQの得点からも何らかの問題を抱えている割合は47.7%となった。これらの先行研究から、日本語学校の留学生は特有の困難を抱えており、より高い割合を占める中国人留学生のメンタルヘルス状態は良好ではないことが分かった。

このような状況を受けて、大学における留学生支援が整備されつつあるのに対して、日本語学校の留学生への支援は乏しく、学割、奨学金、授業料免除などの経済的な支援は一般留学生に比べて少ない（岡・深田、1995）。日本語教育振興協会（2016）の調査によると、日本語学校の設置形態の半分以上が会社（55.9%）である。日本語学校は大学と異なり、政府や自治体からの支援も少ない。浅野（2004）では、来日直後の一番つらい時期に支援がないと留学生が訴えていることが

分かった。日本語学校の学生にはソーシャルサポートも少なく（邱、2007）、専門のスクールカウンセラーや学生相談といったメンタルヘルス支援制度が導入されておらず、継続的なメンタルヘルスへのサポート支援が行われていない。彼らのこのような状況に対して、伊能（2004）は彼らに充実した就学支援の枠組みの構築の必要性を提案しており、江・顧・李・李（2011）は進路指導などの具体的なサポートを行いながら、メンタルヘルスの安定を図る配慮が不可欠と指摘した。しかし、彼らを対象とした調査研究や実践研究の蓄積が少なく、具体的に彼らへどのような形でどのような支援を提供すれば良いかは明らかにされていない。

また、日本語学校の留学生は日本語を学ぶと同時に、日本文化に適応していくプロセスを経験している。この段階は同時に、留学生の次のステップの準備をする期間でもある。彼らの言語能力の向上や異文化適応状況の変化につれ、彼らが抱える困難や求めるニーズも段階的に変化している可能性があると考えられる。一般留学生を対象とした箕口・江川（1994）の研究では、来日長い群（1年から1.5年）は来日短い群（1ヶ月から3ヶ月）と比べて、多くのストレス項目で高い点を示したことが明らかになっている。謝（2014）は日本語学校の中国人留学生を対象に無力感と滞在期間の関連を検討した結果、「疲労感」について、来日3ヶ月より6ヶ月、1.5年の学生の方が有意に高かった。また、「自己不明瞭」について、3ヶ月の学生より1.5年以上の学生の方が有意に高かったという。このように、来日3ヶ月と6ヶ月以上で、彼らが抱えるストレスや困難が異なる可能性が考えられる。

このような背景を受け、日本語学校の留学生に適切な支援を行うためには、彼らのどの時期にどのような困難を抱え、どのようなニーズを持つかを明らかにすることが必要であると考えられる。そこで、本研究は来日3ヶ月未満と来日6ヶ月以上グループを対象にそれぞれ調査を行い、彼らの段階的ニーズを検討することを目的とする。

方 法

フォーカス・グループ・インタビューの採用

本研究は、彼らが抱える困難と段階的ニーズを探るという目的に即して、フォーカス・グループ・インタビューを採用した。Beck, Trombetta & Share（1992）によると、フォーカス・グループ・インタビューは、具体的な状況に即したある特定のトピックについて選

ばれた複数の個人によって行われる形式ばらない議論のことである。フォーカス・グループ・インタビューは、リラックスした雰囲気の中で行われるため、非常に幅の広い、より包括的な参加となるデータが得られるという利点がある (Vaughn, Schumm & Sinagub, 1996; 井下監訳, 田部井・柴原訳, 1999)。さらに、フォーカス・グループ・インタビューの強みとして、参加者の異なる意見や観点が期待される点や、調査者と参加者の相互作用や参加者同士の相互作用によって、得られた知識に深みと広がりが増す可能性が挙げられている (Vaughn, Schumm & Sinagub, 1996; 井下監訳, 田部井・柴原訳, 1999)。また、フォーカス・グループ・インタビューはニーズ評価調査を充実させるのに有効と指摘されている (Buttram, 1990 & Buttram, 1991)。本研究はフォーカス・グループ・インタビューのこれらの強みを活かし、効率的に内容豊かなデータ収集を目指した。

対象者と手続き

本研究は、2015年11月12日にA日本語学校の中国人留学生を対象に実施した。学生相談室に来談しない学生のニーズも把握するため、対象者の募集には雪だるま式サンプリングを採用し、学生相談室に来談する学生に来談したことがない学生の紹介を依頼した。彼らの段階的ニーズを把握することを目的に、来日3ヶ月未満と6ヶ月以上の学生を対象にそれぞれインタビューを行った。対象者の属性は表1に示した通りである。

フォーカス・グループ・インタビューは筆者が勤務しているA日本語学校の学生相談室で行った。対象者にフォーカス・グループ・インタビューの目的、過程、所要時間等を説明した上で、インフォームド・コンセントを取った。同時に、基本情報票に性別・年齢・来日期間の情報等を記入してもらった。インタビュー終了後には、謝礼として200円相当の文具を渡した。インタビューは本研究の目的に即して、「①あなたが日

表1 研究対象者

グループ	No.	性別	年齢	来日年数	中国での日本語学習歴	日本語能力	日本に家族の有無	アルバイトの有無
グループ1 来日6ヶ月以上	1	男性	22	6ヶ月	24ヶ月	1級	無	無
	2	男性	20	12ヶ月	12ヶ月	1級	無	無
	3	男性	27	6ヶ月	36ヶ月	2級	無	有
	4	女性	29	6ヶ月	72ヶ月	2級	有	有
	5	女性	22	8ヶ月	12ヶ月	3級	無	有
グループ2 来日6ヶ月以上	6	女性	22	7ヶ月	36ヶ月	2級	無	無
	7	女性	19	10ヶ月	6ヶ月	3級	有	無
	8	男性	24	6ヶ月	0ヶ月	3級	無	有
	9	男性	24	7ヶ月	0ヶ月	3級	無	有
	10	男性	23	6ヶ月	12ヶ月	3級	無	無
グループ3 来日3ヶ月未満	11	男性	22	6ヶ月	6ヶ月	2級	無	有
	12	女性	21	0.5ヶ月	4ヶ月	5級	無	無
	13	女性	18	0.5ヶ月	2ヶ月	5級	無	無
	14	男性	23	0.5ヶ月	6ヶ月	5級	有	無
	15	男性	22	2ヶ月	未記入	5級	有	無
グループ4 来日3ヶ月未満	16	男性	26	0.5ヶ月	6ヶ月	5級	無	有
	17	女性	23	2ヶ月	0ヶ月	未記入	無	有
	18	男性	21	2ヶ月	6ヶ月	3級	無	無
	19	男性	19	2ヶ月	6ヶ月	3級	無	無

本来で、これまで困っていたこと、②「あなたが今困っていること」の2つの質問を軸に行った。

分析方法及び分析過程

分析方法として、質的研究法を用いた。能智(2011)は、質的研究は意味に関わる知、文脈の中での関係に関する知、価値を考慮した知、主観的な体験に関わる知を対象とし、発見・生成される新たな仮説の形成を目的とすると述べている。本研究は対象者の特性、体験を探究しようとするため、質的研究法が適切であると判断した。

具体的なデータ分析方法はStrauss & Corbin (1998)と戈木クレイグヒル(2006, 2013)で紹介されたグラウンデッド・セオリー・アプローチ(Grounded Theory Approach: 以下GTA)の手続きを参考に行った。GTAは「理論」をデータから抽出した複数の概念(カテゴリ)を体系的に関係づけた枠組みを提示し、抽象度の高い現象の構造とプロセスとを把握する(戈木クレイグヒル, 2006)のに適している。本研究はカテゴリ間の関係を明らかにすることを目的としないため、分析をカテゴリ化までとした。

具体的な手続きとしては、まずインタビューの録音データを中国語で逐語化し、文字データにした。次に、切片化、コーディング、カテゴリの作業を行った。得られたデータの意味のまとまりを見だし、切片化の作業を行った。各切片データに対してコーディングを行った。なお、その後の分析の一致度を保つため、コーディングの段階から日本語で行うことにした。また、正確性を高めるために、日本語のコードを中国語に翻訳して、切片化された元データを対照し、確認及び修正を行った。その後、データに付与されたコード名を比較し、類似したもの同士をまとめ、名前を付けてサブカテゴリを生成した。その後、サブカテゴリの抽象度をさらにあげ、上位概念として名前をつけ、カテゴリとした。サブカテゴリやカテゴリを作成する際に、カテゴリ名やカテゴリの範囲を再考し、カテゴリの精緻化を行った。

データ分析過程

本研究では多少者の属性に基づいて、2段階に分けて分析を行った。最初の段階では、全体を把握するために、来日6ヶ月以上の対象者グループを分析した。次の段階では、さらに初期のニーズを把握するために、来日3ヶ月未満の対象者グループを分析した。その後、両グループのニーズの比較を行うことによって、

ニーズの段階的变化を捉えようとした。

結 果

来日6ヶ月以上の対象者グループのニーズの検討

来日6ヶ月以上の対象者のインタビューデータに対して質的分析の結果、初期のニーズと後期のニーズに分れた。初期のニーズでは、4個のカテゴリと12個のサブカテゴリが得られた(表2)。後期のニーズでは、2個のカテゴリと5個のサブカテゴリが得られた(表3)。以下発話例を取り上げ、初期と後期のニーズを比較しながら、それぞれのカテゴリについて説明する。

まず、初期のニーズに関する4つのカテゴリについて説明する。

1. 【対人関係】

このカテゴリは、彼らが日本で留学生生活を送る上で経験する他者との関係の難しさや困り感である。彼らがく中国人同士の間人関係を経験するだけではなく、く日本人との関係も経験していく一方で、離れた親とのく家族関係も悩みの種のひとつであった。「助けてもらえるとおもったら、勧誘だった(no.4; no.7)」と語られるように、助けてもらうことを期待した『中国人同士に騙されてしまう』ことが挙げられた。最初は寮で生活するケースが多いため、『ルームメイトとの関係うまくいかない』ことも挙げられた。「自分で留学生を決めたから、親から何も言われなくても、プレッシャーが大きい(no.5; no.11)」と語られるように、日本に来て目標を達成して見せるということがプレッシャーになっていた。また、『日本人との付き合いに戸惑う』ことや『日本語能力不足のため日本人とコミュニケーションが難しい』ことなど、日本人との対人関係の難しさは言語によるものだけではなく、考え方や行動パターンによる部分もあった。このように、彼らは【対人関係】において、様々な困難を抱えていた。

2. 【異文化適応】

このカテゴリは彼らが日本の文化を理解し、日本の文化や環境に慣れていく上で感じる困難や困り感である。く日常生活に不慣れく日本語能力不足く心境の変化の3つの側面が含まれる。く日常生活に不慣れくには、『日本人の時間管理の厳しさに不慣れ』や『日本のルールや規範に不慣れ』、『アルバイトのやり方に戸惑う』など日本の文化習慣に慣れない部分が挙げられた。一方で、『タクシーの利用方法が分から

ない』や『賃貸の探し方が分からない』『各種の手続きが分からない』など、これまで経験したことがないため、困難が生じることが挙げられた。いろいろな不慣れさの中で、〈日本語能力不足〉による生活・進学上の不便や困難も挙げられた。

また、〈心境の変化〉として、日本に来たからには、『はじめから逃げ道がない』という決心と覚悟が見られた。一方で、「勉強以外のことでいろいろ苦勞して、何のために日本に来たから分からなくなる (no.1 ; no.4)」と語られるように、これまで勉強だけに集中できれば良い環境から、勉強以外のことも全部一人でやらないといけない環境に置かれて、『留学の意味を疑う』という彼らの心境の変化が見られた。

3. 【進路修学】

多くの学生が進学を目的に日本に来ている中、〈学業・進学における困難と不安〉を初期から抱えていたことが明らかとなった。『大学院での勉強における日本語能力を心配』し、進学面において、〈日本語学習〉に焦りを感じる面も見られた。しかし、このような状況の中で、〈日本語学校〉からは、『必要な情報が得られない』や『サポートが少ない』ことで、多くの留学生にとって初期の段階では唯一のコミュニティで

ある日本語学校が頼りにならないことが推測される。また、〈時間管理の難しさ〉として、授業時間が中国に比べて短いため、『自由時間の使い方に困る』ことが挙げられた。一方で、アルバイトを始めると、『勉強とアルバイトの両立が難しい』と時間管理における困難が挙げられた。

4. 【情報の乏しさ】

初期の留学生にとって、新しい土地での生活に慣れていくために、正確な情報が役に立つと考えられる。しかし、彼らの場合は、〈必要な情報が入手できない〉、入手できても、〈情報が信頼できない〉状況で、【情報の乏しさ】が挙げられた。日本語学校は短期間に日本語を習得する場であるため、滞在が長い『経験者から情報が得にくい』状況である。一方で、彼らは日本語で『インターネットでの情報収集が難しい』ため、情報入手方法が限られている。限られた情報の中で、中国語で提供される情報の情報源が不明確であることや、ブログなど個人による情報提供など、〈情報が信頼できない〉場合もある。このように、彼らにとって、情報を必要とする際に、正確な関連情報が手に入りにくい状況であることが明らかになった。

表 2 来日 6 ヶ月以上（初期）のニーズに関するカテゴリー表

来日6ヶ月以上-初期		
【カテゴリー】	<サブカテゴリー>	『コード』
対人関係	中国人同士の間関係	中国人同士に騙されてしまう ルームメイトとの関係うまくいかない 恋人と別れることでモチベーション低下
	家族関係	家族からのプレッシャー
	日本人との関係	日本人との付き合いに戸惑う 日本語能力不足のため日本人とコミュニケーションが難しい 外国人であることで差別される
異文化適応	日常生活に不慣れ	母国ならできるはずのことができなくなる 日本人の時間管理の厳しさに不慣れ 日本人のマナーに違和感 日本のルールや規範に不慣れ アルバイトのやり方に戸惑う タクシーの利用方法が分からない 賃貸の探し方が分からない 各種の手続きが分からない 物価が高い
	日本語能力不足	日本語能力不足のため日本人とコミュニケーションが難しい 日本語能力不足のため外食が難しい 日本語能力不足のため自分で公共機関に電話できない 日本語能力不足のためメールでの連絡を躊躇う
	心境の変化	はじめから逃げ道がない 留学の意味を疑う
	進路修学	進学先・専門をどう決めるのかが分からない 進学における申請・受験プロセスが分からない 大学のHPの探し方が分からない・読めない 指導教員の探し方を分からない 研究計画書の書き方が分からない 進学できるか心配
	日本語学習	慣れない環境で勉強に集中しにくい 日本語の勉強に難しさを感じる 大学院での勉強における日本語能力が心配 日本語の勉強についていけないか心配
	日本語学校	日本語教師の教え方に戸惑う 必要な情報が得られない サポートが少ない
	時間管理の難しさ	自由時間の使い方に困る 勉強とアルバイトの両立が難しい
情報の乏しさ	必要な情報が入手できない	経験者から情報が得にくい インターネットでの情報収集が難しい
	情報が信頼できない	信頼できる情報収集が難しい インターネットの情報が信頼できない

一方で、後期のニーズに関しては、【異文化適応】と【進路修学】の2個のカテゴリーが得られた。初期に比べて、ニーズが焦点化されるようになったといえる。【異文化適応】と【進路修学】についても、サブカテゴリーの内容の変化が見られた。以下それぞれについて初期のニーズと比較しながら、説明する。

1. 【異文化適応】

〈日常生活の不慣れ〉として、初期では外部環境に適応していく上での困難が多かったに対して、後期では、「みんなそれぞれ自分のことで忙しく (no.2; no.9; no.10)」、『周りとの関わりが減る』ことや、『母国と日本での生活のギャップ』を感じる事が挙げられた。適応が初期の外部環境から、後期自己の内面へと移行しつつあることが明らかとなった。〈心境の変

化〉として、『年齢への不安』、『希望と現実のギャップ』、『進学や生活のストレスで自暴自棄』が挙げられ、不安や失望感が現れた。

2. 【進路修学】

進路修学は困難と不安から不安と焦りへ移行した。進学時期が迫ってくるにつれて、『進学意欲の低下』や『進学目標の低下』という意欲・目標の低下が現れる一方で、『大学・専攻をどう決めるかが分からない』『進学の準備時間が少ない』という現実的な難しさがあつた。初期の困難と不安からさらに問題が内面化したといえる。また、進道として、就職の選択肢もあつたが、『就職の情報収集における困難』もあり、進学においても、就職においても、困難があつた。

表3 来日6ヶ月以上(後期)のニーズに関するカテゴリー表

来日6ヶ月以上-後期			
【カテゴリー】	＜サブカテゴリー＞	『コード』	
異文化適応	日常生活に不慣れ	周りとの関わりが減る 母国と日本での生活のギャップ	
	心境の変化	年齢への不安 進学は唯一の道 希望と現実のギャップ 進学や生活のストレスで自暴自棄	
進路修学	学業・進学における不安と焦り	進学の意味を疑う 進学に焦りをより強く感じる 進学意欲の低下 進学目標の低下 大学・専攻をどう決めるかが分からない 進学の準備時間が少ない	
		進学塾	塾が信頼出来ない
		就職	就職の情報収集における困難

来日3ヶ月未満の対象者グループのニーズの検討

続いて、来日3ヶ月未満の対象者に焦点を当て、来日3ヶ月未満グループのインタビューデータを分析した。その結果、4個のカテゴリーと12個のサブカテゴリーが得られた(表4)。これらは留学生の留学期間のニーズに特化したものである。以下発話例を取り上げながら、6ヶ月以上グループの初期と比べて、新たに得られたカテゴリー、サブカテゴリーについて説明する。

1. 【対人関係】

〈中国人同士の間関係〉として、『話し相手が中国人同士しかいない』ことが新たに挙げられた。「せつ

かく日本に来ているのに、日本人との接触はほとんどない；日本人と交流したい (no.12; no.14; no.19)』一方で、『日本語能力不足のため日本人とコミュニケーションが難しい』という困難があつた。

2. 【異文化適応】

〈日常生活に不慣れ〉と〈日本語能力不足〉の2個のサブカテゴリーでは、さらに幅広く、食・住などの生活面の困難が挙げられた。〈心境の変化〉において、新たに『新しい挑戦に対する恐れ』『来日した最初の興奮から冷める』が挙げられ、具体的な心境の変化が捉えられた。

3. 【進路修学】

【進路修学】では、サブカテゴリー〈進学塾〉が新たに得られ、『塾関連の情報が信頼できない』ことや『塾の効果を疑う』など、塾に対してポジティブな態度ではないことが明らかになった。しかし、〈日本語学校〉より得られるサポートや情報が限られているため、「塾という選択肢を考えざるを得なかった (no.16 ; no.19)」。

4. 【情報の乏しさ】

〈情報が信頼できない〉というサブカテゴリーについて、日本語で信頼できる情報を入手することの難しさに加え、『母国で得た情報が適応しない』『母国で得た情報と来日後の現実のズレ』が挙げられ、母国においても、日本においても役に立つ情報の入手の難しさが挙げられた。

表 4 来日 3 ヶ月未満のニーズに関するカテゴリー表

【カテゴリー】	＜サブカテゴリー＞	『コード』		
対人関係	中国人同士の間関係	話し相手が中国人同士しかない ルームメイトとのトラブル		
	日本人との人間関係	日本語能力不足のため日本人とコミュニケーションが難しい		
異文化適応	日常生活に不慣れ	保険の加入が分からない 引っ越しの手続きが分からない ゴミの分別に不慣れ 食材が違うため調理しにくい 電車の利用方法が分からない テレビ番組の受信設定が分からない 生活用品が違うため分からない 日本人のマナーに不慣れ 慣れたやり方が日本で通用しない 物価が高い		
		日本語能力不足	日本語能力不足のため情報を収集し難しい アルバイトの探し方が分からない 日本語能力不足のため日本人とコミュニケーションが難しい 日本語能力不足のためアルバイト先で差別される 日本語能力不足のため各種手続きが困難 日本語能力不足のためスムーズに買い物ができない 日本語能力不足のため定期をスムーズに購入できない 日本語能力不足のためできるアルバイトが限られている 日本語能力不足のためスムーズに携帯電話を契約できない 中国人同士が多くいても日本語能力不足で生活上の不便がある	
		心境変化	新しい挑戦に対する恐れ 来日した最初の興奮から冷める	
		進路修学	学業・進学における困難と不安	進学のプロセスが分からない 進学できるか不安 進学の情報収集における難しさ 学校・専攻選択における難しさ
			進学塾	塾関連の情報が信頼できない 塾の選択肢に迷う 塾の効果を疑う
			日本語学校	サポートが少ない 必要な情報が得られない 勉強が自分のペースに合わない
			日本語学習	日本語勉強・応用における難しさ
			時間管理の難しさ	自由時間が長いと何をすれば良いか分からない 勉強とアルバイトの両立が難しい
		情報の乏しさ	必要な情報が入手できない	地震の情報が分からない
			情報が信頼できない	母国で得た情報が適応しない 母国で得た情報と来日後の現実のズレ インターネットの情報が信頼できない

考 察

本研究は来日3ヶ月の留学生と来日6ヶ月の留学生を対象に、彼らが抱える困難を段階的に明らかにした。ここでは、彼らの抱える困難の変化を検討しながら、段階的ニーズについて考察した上で、段階的ニーズに合わせた支援の必要性について論じる。

来日期間によるニーズの変化

来日初期と後期に抱える困難の変化から、彼らの困難とニーズが来日期間の経過につれて、変化していくことが示唆された。その変化について、困難の量と質という2つの観点で考察する。

まず、困難の量に関して、4個のカテゴリーから2個のカテゴリーに減ったが、果たして彼らが抱える困難の量が減ったといえるのだろうか。初期と比べて、〈日常生活に不慣れ〉や〈日本語能力不足〉が日本語の上達と生活環境に慣れることによって、緩和されることが考えられる。しかし、【対人関係】における困難や困り感は決してなくなるわけではなく、むしろ、時期的に進学が迫っているため、【進路修学】の緊急度が上がることによって、彼らによって主観的な重要度が相対的に減り、語らなかつた可能性が大きいと考えられる。【情報の乏しさ】も、信頼できる情報源へのアクセスが増えることや日本語による情報がある程度理解可能になることによって、緩和される可能性が考えられる。しかし、後期になっても、依然として『大学・専攻をどう決めるかが分からない』『進学に焦りをより強く感じる』ことが挙げられている。これはむしろ、初期の困難が解決されておらず、集約されたとも考えられる。したがって、彼らの困難の種類が減ったのかもしれないが、その量が必ずしも減ったとは言えない。

困難の質から考えると、来日期間が長くなるにつれて、抱える困難の内容とその緊急度、深刻度が変化したと考えられる。【異文化適応】では、初期の外部環境に適応していく上での物理的な困難から人との関わりへの希求や母国と日本での生活のギャップへの気付きが変わった。異文化適応はある個人が自分の生まれ育った社会環境から離れて、異なった新たな環境に次第に慣れていく過程である（高井，1989）と同時に、自己の内面的環境との闘いであり、自己挑戦、自己変革の過程でもある（江淵，1991）。本研究の結果からは、衣食住などの外的物理環境への適応から、人との関わりなどの文化的環境への適応、自己の内面的環境との闘いへの移行が示唆された。これは、初期に

において自己変革がなかったというわけではなく、異国で生きていく上で基本的な衣食住の環境整備は、彼らにとって最初に解決しないといけない問題だからである。謝（2014）は、日本語学校における中国人留学生を対象に無力感と滞在期間の関連を検討した結果、「自己不明瞭」は3ヶ月の学生より1.5年以上の学生の方が有意に高かった。彼らはその「自己不明瞭」（目標の持てなさ、意欲のなさ、希望のなさなど）を抱える中で、現実生活の中でなんとかやっていけるように奮闘していたと推測される。このように、彼らが抱える困難の変化は現実生活の安定性と異文化適応のプロセスにも深く関わっていると考えられる。

また、『年齢への不安』『希望と現実のギャップ』『進学や生活のストレスで自暴自棄』などの〈心境の変化〉も、異文化適応のプロセスの一部として捉えることができる。滞在時間が長くなるにつれて、客観的に周りを見るようになり、不満や失望も次第に生まれてきたと考えられる。

一方で、【進路修学】においては、初期で得られるサポートが少なく、問題が解決されないまま、後期になると進学が迫ってくるため、問題が緊急度・深刻度が増したと考えられる。また、初期では、ただ分からないという漠然した不安だったが、後期では、『進学の準備時間が少ない』という焦りが加わり、より問題解決が難しくなると考えられる。また、進学時期が迫ってくるにつれて、『進学意欲の低下』や『進学目標の低下』という意欲・目標の低下が現れ、心理面への影響がより強くなったと考えられる。このように、初期の問題が解決されないままに引きずると、意欲・目標低下や不安・焦りなどと問題が内面化してしまい、メンタルヘルスの問題を引き起こす可能性も考えられた。

段階的ニーズに合わせた支援の必要性

では彼らのこれらの困難はどのようなニーズを反映しており、どのような支援を必要としているのだろうか。

初期では、【対人関係】【異文化適応】【進路修学】【情報の乏しさ】の4つの側面に、彼らが抱える困難が見られた。これらの困難が同時に、彼らのそれぞれの側面におけるニーズを反映している。【対人関係】においては、ルームメイトや家族との関係の問題における心理的支援が必要となると考えられる。日本人との関わり方について、それに特化したソーシャルスキルトレーニング支援が役立つと考えられる。また、日本語能力のうちの会話能力、コミュニケーション能力を改

善するような教育も求められる。【異文化適応】においては、オリエンテーションやガイダンスでしっかり情報を提供してあげることによって、ある程度困難や困り感が解消される可能性はあるが、個人によって、適応能力、新しいことの習得能力が異なるため、個別対応が求められることがある。その際に、そのような個別対応ができる体制を予め作っておくことが重要と考えられる。また、〈心境の変化〉については、必要に応じて適切な心理的支援が求められる。【進路修学】においては、彼らが安心して勉強に集中できるような環境作りが求められる。日本の進学プロセスは中国と全く異なり、かつ複雑であるため、まずそのプロセスを知ってもらう必要がある。しかし、大学・大学院・専門学校のそれぞれの進学志望が学生によって異なるため、画一的な支援は難しいと考えられる。同じ目標を持った集団への支援や個別支援が有効であると考えられる。例えば、同じような目標を持った卒業生の経験談が役立つと思われる。【情報の乏しさ】は【異文化適応】【進路修学】における困難を引き起こす要因のひとつとも考えられるため、解決が重要視されるべきである。現代の情報社会では、インターネットで情報が氾濫していることもあり、彼らに情報を伝えていくために、正確な情報を伝えることはもちろん、情報源を明確化すること、母語で発信することも同時に求められる。

後期では、【異文化適応】【進路修学】の2つの側面にフォーカスした支援が求められる。彼らが地域から孤立しないように、日本人との交流の機会を学校や地域で作ることは留学生にとって重要な取り組みであると同時に、地域の住民の異文化コンペテンシーの向上や地域の活性化にも繋がるだろう。それでも、異文化適応の次の段階に入り、失望や不安などの感情がメンタルヘルスの問題を引き起こすきっかけになりかねないため、それに適した心理的支援も求められる。一方で、後期では【進路修学】を本格的に考えて、行動しないといけない時期でもある。彼らの困難と困り感の中では、重要度があがる時期でもある。この時期にまだ進路の方向性が決まっていなると、学生が焦ってしまい、落ち着いて情報収集し、ステップバイステップに進学に関することを進めていくことが難しい可能性も考えられる。周りとの状況が異なるとなると、周りに助けも求め難く、それが長引くと、1人で悩みを抱えてしまい、心理的・身体的不調を引き起こす可能性もある。したがって、この段階では彼らが助けを求めることを待たずに、積極的に彼らの状況をアセスメン

トし、必要に応じて進学サポートや心理的な支援を提供することが必要である。合わせて、彼らの希望に応じた就職関連情報の提供も求められる。

後期で見られる問題やニーズの多くは、初期でサポートすることによって防げる、または緩和する可能性がある。しかし、初期で解決されないまま後期まで引きずってしまうと、本人の負担が増えるだけでなく、問題がこじれてしまったり、深刻化・複雑化してしまったりすることによって、解決に必要なとされるコストも労力も上がる。したがって、初期で、彼らのニーズに応じて支援を提供することによって、留学生にとって利益の向上と支援提供側のコストの低減に繋がることを期待できる。また、日本語学校の形態から考えると、これらの支援をすべて日本語学校が担うことは難しいと考えられる。日本語学校が外部の支援組織や留学生が生活する地域の自治体と連携して、留学生に対する支援を講じることが期待される。

文 献

- 浅野 慎一 (1997). 日本で学ぶアジア系外国人—研修生・留学生・就学生の生活と文化変容—大学教育出版
- 浅野 慎一 (2004). 中国人留学生・就学生の実態と受け入れ体制の転換 労働法律旬報2004.5.25
- Beck, L., W. Trombetta, and S. Share. (1986). Using focus group sessions before decisions are made. *North Carolina Medical Journal*, 47, 73-74.
- Buttram, J. L. (1990). Focus groups: A starting point for needs assessment (Report No. EA-0220151). Philadelphia: Research for Better Schools, Inc. (ERIC Document Reproduction Service No. ED 322 628).
- Buttram, J.L. (1991). Conversations on school restructuring in the mid-Atlantic region (Reprot No. EA-023-399). Philadelphia: Research for Better Schools, Inc. (ERIC Document Reproduction Service No. ED 337 874).
- 江淵一公 (1991). 在日留学生と異文化間教育 異文化間教育, 5, 4-20.
- 伊能裕晃 (2004). 日本語学校における就学生支援—必要となる認識, 活動, 組織についての提言—留学生教育, 9, 169-180.
- 江 志遠・顧 佩靈・李 欣擘・李 曉霞・韓 海錦・野島一彦 (2009). SDSとGHQ30による在日中国人就学生のメンタルヘルスに関する実態調査—基礎的屬性の観点から—九州大学総合臨床心理センター紀要, 1, 121-132.
- 江 志遠・顧 佩靈・李 欣擘・李 曉霞 (2011). 在日中国人就学生の異文化ストレスとソーシャルサポート源がメンタルヘルスに及ぼす影響 心理臨床学研究, 29(5), 563-573.
- 加賀美常美代 (1994). 異文化接触における不満の決定因: 中国人の就学生の場合 異文化間教育, 8, 117-126.
- 箕川雅博・江川 緑 (1994). 在日留学生の生活ストレスの実態とその関連要因に関する研究 日本教育社会学会大会発表要旨集録, 46, 74-75.
- 村瀬さな子・村瀬澄夫・北島正義・山内 徹 (1996). 中国人留学

- 生および就学生の精神保健: Beck Depression Inventory による比較調査 日本公衆衛生雑誌, 43(5), 398-402.
- 日本学生支援機構 (2016). 平成27年度外国人留学生在籍状況調査結果 Retrieved from http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2015/_icsFiles/afiedfile/2016/03/14/data15.pdf (2016年6月26日)
- 日本語教育振興協会 (2016). 日本語教育機関の運営に関する基準 Retrieved from <http://www.nisshinkyo.org/review/pdf/index02.pdf#search='日本語学校+生活指導者> (2016年6月26日)
- 日本語教育振興協会 (2016). 平成27年度日本語教育機関実態調査 Retrieved from <http://www.nisshinkyo.org/article/pdf/overview05.pdf> (2016年6月26日)
- 能智正博 (2011). 質的研究法 臨床心理学を学ぶ6 東京大学出版会
- 大橋敏子 (2008). 外国人留学生のメンタルヘルスと危機介入 京都大学学術出版会
- 岡 益巳・深田博己 (1995). 中国人留学生と日本 白帝社
- 邱 焱 (2007). 中国人留学生が必要とする日本語学校のサポート尺度の作成 留学生教育, 12, 37-46.
- 邱 焱・孫 怡 (2009). 学校によるサポートと主観的幸福感に関する在日中国人就学生と留学生の比較 留学生教育, 16, 57-63.
- 戈木クレイグヒル 滋子 (2006). ワードマップ グラウンデッド・セオリー・アプローチ論を生みだすまで 新曜社
- 戈木クレイグヒル 滋子 (2013). 質的研究方法ゼミナールグラウンデッド・セオリー・アプローチを学ぶ第2版 医学書院
- Strauss, A. L., & Corbin, J. (1998). Basics of qualitative research: Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory, 2nd ed. Sage. (ストラウスA. L., & コービンJ. 操 華子・森 岡崇 (訳編) (2004) 質的研究の基礎: グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順 医学書院)
- 高井 次郎 (1989). 在日外国人留学生の適応研究の総括 名古屋大学教育學部紀要教育心理学科, 36, 139-147.
- Vaughn, S., Schumm, J. S., Sinagub, J. (1996). Focus Group Interviews in Education and Psychology. SAGE Publications, Inc. (S・ヴォーン, J・S・シューム, J・シナグブ. 井下 理・田部井 潤・柴原 宜幸 (訳) (1999). グループインタビューの技法 慶応義塾大学出版会)
- 謝 延瓊 (2014). 日本語学校における中国人留学生の異文化ストレスと無気力感に関する研究九州大学大学院人間環境学研究院紀要, 15, 53-61.

(指導教員: 下山晴彦)